

古代メソポタミア文明の最末期

はじめに

古代メソポタミア文明は、その誕生や最盛期については多くが語られている。しかし、その終焉に関しては概説書などではほとんど触れられていない。

もちろん、古代メソポタミア文明というものが、何の痕跡も残さずに消滅したわけではなく、多くのものがその後の西アジアの文明に引き継がれていったことは事実である。それでも、我々が「古代メソポタミア文明」というときにイメージされる代表的なもの、たとえば楔形文字や円筒印章は、紀元前一千年紀には徐々に他のものにとって代わられ、やがて消えていくことは事実である。終焉、という言葉を使っても許されるであろう。

終焉の時期は、政治的な出来事から、前六世紀アケメネス朝が、メソポタミアを含む西アジア大部分を征服した時期や、そのアケ

メネス朝をアレクサンドロスが滅ぼした時期、などがよく候補に上る。しかし、以下述べるようにセレウコス朝時代においても、地域的には史料がバビロンとウルクとにほぼ限定されるとはいえ、従来の伝統的な体制は「存続」していたようにみえる。単に、政治勢力の移動によって終焉を論じることには無理がある。

春田 晴郎

ここでは、セレウコス朝時代から楔形文字が最終的に消滅する紀元前後までを、「古代メソポタミア文明の最末期」と呼んで、この時代なお楔形文字文書を産する都市（バビロン）の特徴を論じる。そして、「宗教都市」とでもみなせるような伝統的な体制がなぜ「存続」しえたのかを問い、その理由について仮説を提示する。その上で、史料にみえる宗教的事象がさかんに史料にみえることが、この仮説によってどう説明できるかを示し、最後に「復興」にもみえかねないこれらの事象に明確な限界があったことを指摘する。現段階では、仮説に基づく論理展開にすぎないが、種々の

宗教的事象の展開を考える際の、興味ある参考にはなるだろう。

一・バビロンと神殿

アレクサンドロス以降紀元前後くらいまで（本論の古代メソポタミア文明の最末期、単にヘレニズム時代と呼ぶ研究者も多い）に、楔形文字史料を出している都市は、バビロンとウルクにほぼ限られる。ここでは、前二世紀後半のセレウコス朝からアルサケス朝へ支配が移った後もいくらかの史料が存在するバビロンを中心に取り上げる。

この時代のバビロンという都市の性格について、ギリシア都市に変貌した、という説も唱えられたが、それに対する反論などを通して、以下のような見解が現在では通説になっている。⁽²⁾

バビロンの中心は、エサギラ神殿である。他にも、エサバドやエフルサグシキラなどの神殿があるが、これらと併せて全体として一つの組織体をなしていた。また、都市内部には神殿以外の有力な機関・団体は、ギリシア人共同体の他は存在しなかった、と考えられる。神殿経済テキストや天文日誌に全く出てこないからである。天文日誌は、ギリシア人共同体については触れることがあるので、有力な神殿外の団体があれば、記されたことであろう。⁽³⁾なお、政府側の出先は、もちろん存在する。

エサギラ神殿内の最高意志決定機関は、「シャタンムと、エサギラの評議会（キニシュト）」と文書には表れている。⁽⁴⁾そして、その下にさまざまな神殿職員が存在し、業務を行なっていた。これら

の中から、宗教儀礼に特に関係の強そうな職種を挙げると、以下のようになるだろう。読経者（カルーおよびナルル）、呪術師（アーシブ）、神への犠牲として捧げる料理・飲料を準備する各種の職（アラツル、ヌハテインム、シラーシユ、タービフなど）、そして天文学者／占星術師（エヌーマアヌエンリルの書記）。

そして、彼らによつて日常の宗教儀式が執行されていた。⁽⁶⁾ウルク出土のテキストから類推すれば、夜明けの開門時の読経から各種の献酒・献食、そして閉門時に至るまでの毎日の儀礼、あるいは毎月の何日にどの神への讃歌を詠むか、が定まっていた。新年祭などの年ごとの行事については、バビロン出土史料でも、例証できる。

これらの宗教儀礼は、儀礼テキストや天文日誌に記述されている。⁽⁷⁾神殿経済テキストの支出分に関わるほとんどは、これらの儀礼に伴う出費に関するものと、職員に対する支給を記したものである。神殿の収入については、いくつかの種類があるが、史料から判断すると神殿の入り口に置かれた「箱」からの収入も無視できないものであったらしい。⁽⁸⁾

以上のように、現地史料からみられる、メソポタミア文明最末期におけるバビロンの姿は、それ以前のアケメネス朝・新バビロニア時代のそれと大きくは異ならず、伝統的体制が存続しているようにみえる。そして、通説でも、その伝統の強さを強調している。⁽⁹⁾あるいは、政治的権力が失われている点を考慮すれば、宗教学都市、といつてもよさそうにみえる。

二・ 伝統存続の理由

伝統的体制の存続は、既にアルサケス朝パルティア時代に入った、紀元前九〇年頃のバビロン出土神殿経済テキストにも窺える⁽¹⁰⁾。しかし、ここで一つの疑問が生ずる。古代メソポタミアの伝統がこの時代にもまだ根強く残っていたのならば、なぜ、その後時を経ずして、楔形文字に代表される古代メソポタミア文明は終焉を迎えてしまったのだろうか。

実際、バビロンでも、神殿経済テキストは紀元前九〇年頃以降は知られておらず、それ以後のテキストは天文関係のみになつてしまふ⁽¹¹⁾。それも歴史・宗教史料として価値のある天文日誌は紀元前四七―六年の記録が現存する中で最も新しく、以降は暦計算テキストのみになる。知られている最後の楔形文字文書は紀元後七五年の天体暦を記した文書である⁽¹²⁾。この頃が古代メソポタミア文明の終焉と呼んでよいだろう。

従来の説では、史料に表れる伝統の強さを強調するあまり、それがその後なぜ急速に消えていったのか十分に説明してこなかった。この現象を説明するためには、「伝統の存続」の内実を見極めることが必要となる。

さて、改めて、この時代のバビロン出土楔形文字史料を概観してみると二つの特徴に気がつく。一つは天文関係の史料数の多さであり、もう一つは天文学者／占星術師の地位の高さである。

史料数の多さは、数理天文テキスト・非数理天文テキスト（天

文日誌など）どちらにも言えることである。また結局天文テキストのみが残ることも、これと関連して考えられよう。天文テキストの史料数の多さはウルクにも共通する（ただし、こちらは数理天文テキスト中心⁽¹⁴⁾）。

天文学者／占星術師の地位の高さは、例えば、紀元前二七七年の BOR4. 132 というテキストからも窺える⁽¹⁵⁾。このテキストは、神殿の uppuḫeti「監督官？」という地位にあった天文学者が、当時バビロンを支配していたペルシア湾頭のカラケエネという国の王の下に派遣され、そこで給与を得るようになったので、その後任として彼の子供達を任ずる、という内容である。

史料の種類は大きく異なるが、ストラボンやプリニウスの記述でも、アルサケス朝パルティア時代のバビロン・ウルクが天文学者中心のまちであるかのように記述されている⁽¹⁶⁾。

当時のバビロン（およびウルク）で、天文学の研究というものが重要であり、天文学者が高い地位を占めていたことは疑いない。それはなぜだろうか。そして、このことから何が導き出せるか。天文学者を王の下に派遣していた、という記述を手がかりに、一つの仮説を提示してみる。

この時代のバビロニア天文学は、やや遅れて発達したギリシア天文学と同様、きわめて高い水準に到達していた⁽¹⁷⁾。月食の予報ができるようになったことに代表されるように、天体暦の作成が可能になった。そこで、この地を支配した各王朝は、暦法の計算のために、天文学者を必要とし、保護・育成しようとしたのではな

いだらうか。そして、天文学者を再生産する体制として、従来通りの神殿体制にもあまり手を加えずにいいのだではないだろうか。

楔形文字や円筒印章に代表される古代メソポタミア文明は、紀元前二千年紀半ばから衰亡に向かっていた。この原因としては、アルファベットを利用するアラム人の流入や、ペルシア人など新興勢力の台頭で西アジアの中心がメソポタミアとはいえなくなつたこと、などが挙げられるだろう。こうした傾向は、ヘレニズム時代にはもっと加速されるはずであつた。というより、バビロン・ウルク以外では実際そうなり、楔形文字文化は消えていった。

しかし、これら両都市（ボルシツパなども含めることができそうであるが）は、支配権力側から、天文学の発展を要請され、そのため、これに付随して伝統的な体制が残され、伝統的な宗教儀礼が存続していったのではないだろうか。いわば、伝統的儀礼が「残された」のである。

都市の機構はむしろ単純化し、一見宗教都市のようになる。この点も、伝統的体制が、変形されながらも「残された」と解釈すれば、説明が容易になる。

紀元前二世紀にヒッパルコスが現れるなどして、ギリシア系のヘレニズム天文学がバビロニア天文学を完全に凌駕し、おそらくそれが東方に伝わっていった頃に、バビロニア天文学の史料が姿を消すのは示唆的である。⁽¹⁸⁾

三、おわりに

以上のような仮説に立てば、古代メソポタミア文明最末期の伝統的宗教・儀礼の限界も明らかになる。自律的に復興したのではなく、外部との関係によつて存続しているのであり、暦法計算の要請を大きく越えることはできなかったであろう。

ヘレニズム期あるいはむしろギリシア・マケドニア人の支配が終わつて以降、西アジアではギリシア建築の技術（例えば速乾性のモルタルの使用）を取り入れた壮麗な建築物が各所で建てられるようになる。これらの建築物は、ハトラなどのように、神殿として建てられることが多い。しかし、バビロンでは、アケメネス朝時代に破壊されたジツグラトが再建されることはなかつた。⁽¹⁹⁾

また、その限界は天文学／占星術そのものの中に求めることができるかもしれない。バビロニア天文学は、天体の座標表示を行なうために黄道を十二に分け（黄道十二宮）、その上で特定の日時の天体位置を計算することも可能にした。これらは、ホロスコープ占星術が可能となる必要条件である。しかし、バビロニアでは、この時代の占星術文書は、数理天文テキストあるいは観察天文テキストに比べれば出土量ははるかに少ない。⁽²⁰⁾西方での占星術の興隆とは対照的ですからある。この点なども、求められたものが、占星術ではなく、天文暦法であつたと考えれば説明が付く。

技術や学問の進歩は、宗教文化（現代的用法での呪術や迷信を含む）を大きく発展させる可能性をもっているのだが、古代メソ

ボタニア文明最末期においては、そのような宗教文化の発展は起こらなかったのである。

註

- (一) 史実材料のリストは、J. Oelsner, *Materialen zur babylonischen Gesellschaft und Kultur in hellenistischer Zeit*, Budapest 1986, 参照。
- (二) キリントの誕生の叙述を語った G. J. P. McEwan, *Priest and Temple in Hellenistic Babylonia*, Wiesbaden 1981, に於ける註解を引く。J. A. Brinkman, Remarks on G. J. P. McEwan, *op. cit.*; Oelsner, *op. cit.*; R. J. van der Spek, The Babylonian Temple during the Macedonian and Parthian Domination, *Bibliotheca Orientalis* 42 (1985), に於ける註を、参照。
- (三) 天竺口説は、A. J. Sachs and H. Hunger, *Astronomical Diaries and Related Texts from Babylonia*, Vols. 1, 2, Wien, 1988, 1989, を引く。更に、天竺口説は、天竺の政治 (politik) に、引く。R. J. van der Spek, *Grondbesit in het seleucidische Rijk*, Amsterdam 1986, pp. 73-76, 参照。
- (四) 総論の BOR4, 132 (註9) に於ける、天竺の神聖区の本座のリストは、R. J. van der Spek, The Babylonian City, in: A. Kuhrt and S. Sherwin - White eds., *Hellenism in the East*, Berkeley and Los Angeles 1987, pp. 57-74, に参照。
- (五) McEwan, *op. cit.*, pp. 7-66.

- (9) McEwan, *op. cit.*, pp. 159-182.
- (7) 儀礼テキストは、R. Thureau-Dangin, *Rituels accadiens*, Paris 1921; 天竺口説は、(註9)参照。
- (8) 神聖の天竺口説のリストは、McEwan, *op. cit.*, pp. 121-158, 参照。
- (6) (註9)の McEwan, *op. cit.* を参照。
- (10) G. J. P. McEwan, *Arsacid Temple Records, Iraq* 43 (1981), 本文の天竺テキストを参照。
- (11) (註9)所収の天竺口説の天竺テキストは、天竺口説の天竺口説の天竺口説を参照。
- (12) 天竺口説の天竺口説の天竺口説は、A. Sachs, Babylonian Observational Astronomy, in: D. G. Kendall et al., *The Place of Astronomy in the Ancient World*, London 1974, pp. 43-50; 最後の天竺口説の天竺口説は、A. Sachs, The Latest Datable Cuneiform Tablets, in: *Kramer Anniversary Volume. Cuneiform Studies in honor of S. N. Kramer*, Neukirchen/Vluyn 1976, pp. 379-398, 参照。
- (13) Oelsner, *op. cit.* (註一) pp. 191-224, を引く。pp. 215-220 参照。
- (14) Oelsner, *op. cit.*, pp. 139-191, を引く。pp. 180-186 参照。
- (15) 天竺は、R. J. van der Spek, The Babylonian Temple during the Macedonian and Parthian Domination, *Bibliotheca Orientalis* 42 (1985), に参照。
- (16) Strabon, *Geography*, 16,1,6; Pliny, *Natural History*,

6, 121-123.

- (17) この時期のバビロニア天文学については、O・ノイゲバ
ウアー(矢野道雄・斎藤潔訳)『古代の精密科学』恒星社厚生
閣一九八四、八九〜一三二、がきわめて重要。
- (18) ノイゲバウアー前掲書 一三三〜一七六頁参照。
- (19) 天文日誌に全く表れないことから、再建されていないこ
とは明白である。